

SHOW HEY シネマール

★★★

つかのまの愛人

2017年/フランス映画
配給：コピアポア・フィルム/76分

2018 (平成30) 年 10 月 20 日鑑賞

シネ・ヌーヴォ

Data

監督・脚本：フィリップ・ガレル
出演：リック・カラバカ/エステール・ガレル/ルイズ・シュビロット

■ショートコメント■

◆フランスの巨匠フィリップ・ガレルの名前を私は知らなかったし、『ジェラシー』『パリ、恋人たちの影』に続く、“愛の3部作”と呼ばれる本作も全く知らなかった。しかし、シネ・ヌーヴォで『乱世備忘 僕らの傘運動』を鑑賞するのに合わせて、76分というコンパクトな本作を鑑賞。

◆冒頭から、大学で哲学を教えているジル教授（エリック・カラバカ）が教え子であるマリアヌ（ルイズ・シュビロット）と2人でトイレに入り、コトを為そうとしているシークエンスを見ると、つくづく“フランスは愛の国”だと思ってしまう。しかし、2人の愛の巢に、同棲中の恋人から追い出されたという一人娘のジャンヌ（エステル・ガレル）が転がり込んでくると・・・？

毎夜ジャンヌはソファで眠る生活だが、その間もジルとマリアヌの寝室では音を立てないように夜の営みが……。そして、昼間はほぼ同じ年のマリアヌが失意のジャンヌを慰めていたから、そこに奇妙な女同士の友情が生まれかけていたが……。

◆ジャンヌを演じるエステル・ガレルはフィリップ・ガレル監督の実際の娘とのこと。そんなこともあって（？）、外から帰ってきたジルが、マリアヌより先にジャンヌにキスをすると、アレレ、マリアヌはおかんな……。ジルは「娘が先だ」とシャーシャーとしていたが、女同士の嫉妬って、こんなところにも出るの……？

他方、いくら年上の教授と同棲していても恋愛は自由！？いくらフランスでもそんなことはないはずだが、ジルのゼミでマリアヌがゼミの男子学生と見つめ合っていると……？さらに、酒の場で若い男から声をかけられマリアヌが、まんざらでもないような反応をしていると……？そんな場面でのジルの嫉妬心は私にもわかる。さすがフランスの巨匠は恋愛映画における男女の機微に通じていると感心しきりだが、本作のテーマは一体ナニ？

◆恋人と別れた心の傷が癒えないジャンヌは、ある日窓から飛び降り自殺をしようとしたからビックリ。マリアーヌは何とかそれを止めたが、なぜジャンヌはそれを「パパには言わないで」と訴え、マリアーヌはそれをOKしたの？ここでこの2人の女はジルに対する秘密を共有する関係になったが、それって一体何の意味があるの？さらに、自殺するのならいつでも自由にできたのに、なぜジャンヌはあのタイミングで？ひょっとして、あれは狂言だったのでは？そんな疑問も湧いてくる。

バブル全盛時代の1988年に「プリンセスプリンセス」が歌って大ヒットした“M”では、女の子は別れた恋人の頭文字である“M”のアドレスを手帳から消せなかったが、電話はしなかったはずだ。しかし、本作のジャンヌは、ある日ついに別れた恋人に対して電話を・・・。

他方、マリアーヌは相変わらずの浮気性。しかも、簡便なトイレ内でのセックスが結構好きらしい。マリアーヌがあの日男子学生とトイレに入る姿を目撃したジルが、近くに寄ってみると、中からはマリアーヌの喘ぎ声が聞こえてきたから、さあジルの怒りは・・・？

◆本作は2017年製作だが、カラーではなく前編白黒。登場人物は少ないし、男女3人の恋愛の機微を描いた映画だから、セットの費用等もかからず、製作費は安いはず。しかも、エステルはフィリップ・ガレル監督の妻の娘だから、出演料も格安に・・・？

それはともかく、なぜ本作が『ジェラシー』『パリ、恋人たちの影』に続く“愛の3部作”の最終章と呼ばれているのかもわからないまま、奇妙な男女3人の共同生活の顛末を描く本作は終了。マリアーヌが去って行ったのは当然だが、ジャンヌはいとも簡単に昔の恋人とヨリを戻し、再び同棲生活が始まったからジルは今は一人ぼっちに。すると、きっと寂しいのでは？いやいや、ジルのような男はきっとすぐにマリアーヌのような次の“つかぬまの愛人”をすぐに見つけるのだろう。

2018（平成30）年10月22日記